

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820018

研究課題名（和文）

中央アフリカ低地熱帯林における川の民と森の民の交流史に関する歴史生態学的研究

研究課題名（英文）

A historical ecological study on the relationships between the river people and the forest people in central African lowland tropical forest

研究代表者

大石 高典 (OISHI TAKANORI)

京都大学・こころの未来研究センター・研究員

研究者番号：30528724

研究成果の概要（和文）：

カメルーン東南部の低地熱帯林に居住する狩猟採集民バカ・ピグミーと漁撈農耕民バクウェレ人は、1960年の独立前後に現在の居住地への定住化・集住化を強いられた。定住化前の居住地跡の分布を聞き取りと踏査により明らかにした。森林植生へのヒューマン・インパクトを明らかにするため、履歴の異なる居住地跡において植生調査を行った。一時居住を行う森林キャンプと定住的利用をおこなう村落では放棄後の森林植生に大きな相違が観察された。

研究成果の概要（英文）：

The Baka hunter-gatherers and the Bakwele fisher-farmers have experienced forced sedentarization and concentration around 1960 in Southeastern Cameroon. This study elucidated the distribution of villages and forest camps which had been used before the sedentarization by interview and verification by expeditions. Vegetation survey had been made in abandoned camps and villages to evaluate human impact on tropical forest vegetation. Significant differences were observed between ancient temporary forest camps and ancient sedentary villages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1170,000
2010年度	660,000	198,000	858,000
年度			
年度			
年度			
総計	1560,000	468,000	2028,000

研究分野：生態人類学

科研費の分科・細目：文化人類学（含む民俗学）

キーワード：狩猟採集民、農耕民、アフリカ熱帯林、民族生態学、ヒューマン・インパクト、カメルーン

1. 研究開始当初の背景

中央アフリカ熱帯雨林の住民であるピグミー系狩猟採集民とバンツー系農耕民は、集団原理の相違や社会的地位の不平等（ピグミー系住民の劣位）がありながらも、不即不離の関係を保ちながら共存してきた（竹内潔,2001など）。両者の民族間関係については

これまで2つの対照的なモデル、生計経済上の相互依存関係に基づく共生モデル(Terashima,1986)と狩猟採集民が農耕民に一方的に従属させられるとするハウスモデル(Grinker,1994)が提出されてきたが、いずれも静態的な社会モデルにとどまっている。例えば、カメルーン東南部では、過去100年

に限っても植民地政府による商品作物栽培の導入、世界大戦、60年代の集住化政策施行、70年代の木材伐採会社の進出、90年代の国立公園設置など外部世界との接触に起因した激しい社会経済上の変化があったが、これらの度重なる「有事」による民族間関係の攪乱・再編過程を乗り越え、両集団がいかにして現在の共存関係を形成・維持するに至ったのかを理解するためには、両者の集団間関係を現在から可能な限りの過去に遡って明らかにする歴史的な分析視点が欠かせない。しかし、これまでは過去の生業活動や自然に対する人為影響の分析に有効だと考えられる確からしい方法論がなかったため、この分野については手つかずであった。

2. 研究の目的

現在熱帯林のなかで同所的に居住する漁労農耕民と狩猟採集民を対象に、両者の過去の移住履歴を人為植生をマーカーに再構成し、共存関係の変遷をとらえることを目的とした。バンツー系漁労農耕民であるバクエレは、ほとんど河川沿いに居住地を移動させるため、これまでの漁労活動に関する調査の過程で、過去の放棄集落跡の位置と移動経路の概要がわかっている。

そこで本研究では、とくにピグミー系狩猟採集民バカの放棄集落跡とバクエレの旧村落の位置関係や当時の経済活動に的を絞った聞き取り調査を行う。測量や植生調査により過去の集落周辺の土地利用を復元し、インフォーマントの年齢や植生の回復程度から、居住放棄時期の推定・編年を試みる。以上により、漁労農耕民の移住履歴に関する知見を土台に、居住地跡がすぐに旺盛な森林植生に覆われてしまう、あるいは過去に関する体系的な聞き取りが行いにくい等の理由でこれまでアプローチが困難であったピグミー系狩猟採集民バカの過去における居住地の分布の時代変遷を、農耕民集落との位置関係から明らかにする。

3. 研究の方法

(1)1960年代の集住化の単位であったドンゴ村および周辺3村に居住するバカとバクエレの両民族集団について、各家系集団の壮年以上の成員から、それぞれ数人ずつインフォーマントを選び、定住集落において個別に生活史に関する以下の項目について詳細な聞き取り調査を行った(父親・母親の出身地、出生地、これまでに居住したことのある居住地、活動内容、過去のできごと、移住経験の有無、移住の理由、過去に居住したことのある

居住地の名前と位置)。

(2)得られた過去の居住地のうち、インフォーマントとともに訪問が可能である集落跡、キャンプ跡をすべて踏査・訪問し、地名の収集を行った。GPS端末を用いて位置を記録し、分布を20万分の一地形図及び衛星画像(QuickBird社)に落とした。それぞれの居住地跡で、利用時期(何歳位のか、誰か生まれた者はいなかったか)、居住時の集団構成、行われた活動、以前はどんな植生が周りにあったか、なぜ放棄したのか、移住先、記憶に残っているできごと、に関して詳しく聞き取り調査を行った。

(3)バクエレ、バカ双方のインフォーマントにより得られた情報を整理・検討して、両者の記憶が重なる過去の居住地を複数地点選び出し、海外共同研究者および調査補助者とともに現地に泊り込み、測量・植生調査を行って居住利用をはじめとする人為的な攪乱による植生へのインパクトを評価した。植物乾燥標本を作成して、現地および国立植物標本館(ハーバリウム)にて同定に供した。

(4)これまでに得られているドンゴ村のバカ、バクエレ双方の生活についての生態人類学的、社会学的資料と比較して、両者の生活圏(テリトリー)および生業経済における相互依存度の変遷を推定する。カメルーン共和国の首都(ヤウンデ)やフランス共和国で、過去における当該地域と外部社会の交渉について文献や古地図資料収集を行い、居住地移動に関する言説との関連性を検討した。

4. 研究成果

(1)バクエレ、バカ・ピグミー両居住集団の動態

ドンゴ村における現在の人口は、バクエレが約250人、バカ・ピグミーは約300人であり、数キロずつ離れた6つの小集落に分かれて隣接(5小集落)ないし混住(1集落)をしている。それぞれの小集落は、1つから8つまでの父系大家族により構成されている。バクエレは、ジャーコ(「ジャー川上流の人々」という地縁的集団アイデンティティを共有しているが、各家系の出自集団はバクエレのみならず、コナベンベ(Konabembe)、ジェム(Djem)など周辺諸民族集団より成る。バクエレ・ジャーコ各家系集団の年長者への聞き取り調査の結果、かつては熱帯林の中に分散して居住し、しばしば対立関係にあった各家系集団が、婚姻を通じた女性の交換により密接な関係を持つようになり、出自民族集団を超えたレベルで地縁的な結合を重視した集団アイデンティティが形成されたこと

が示唆された。一方バカ・ピグミーの年長者への聞き取りから、ドンゴ村のバカ・ピグミーには、バクエレの家系集団とともにジャー川ぞいに移住してきたグループと、バクエレ集落の動きとは関係なく、ほかの農耕民集団の村を離れてドンゴ村に移住・定着したグループとが混在していることがわかった。また、バクエレ、バカ・ピグミーともに通婚圏は半径 100 キロ以上に広がっていた。

(2) 定住集落跡の分布と地名

聞き取りに基づく現地踏査により、21 のバクエレの定住集落跡、10 のバカ・ピグミーのベースキャンプ跡が確認された。21 のバクエレの定住集落跡は全てジャー川に面して立地していたが、バカ・ピグミーのキャンプ跡は農耕民集落から森の中に 300 メートルから 3 キロメートルほどの範囲に位置していた。バクエレの定住集落跡には必ず地名がつけられていたが、バカの居住地跡には、必ずしも固有の地名がなく、近くのバクエレの集落跡の名前が当てられていることが多かった。

(3) 環境利用

訪れた少なからぬ集落跡地で、かつてのカカオ栽培およびゴム採集の痕跡（カカオ園およびゴムの純林）を認めることができた。少なくとも 1930 年以前にさかのぼる集落跡にまで、これらの栽培・採取の痕跡が残っていることは、対象地域における植民地経済の浸透の程度を示すものとして注目される。現在でも雨季を中心に多大の時間が割かれるカカオ栽培が、これら集落跡での生活においても大きなウェイトを占めていたことは明らかだと考えられる。また、ゴム採集やカカオ栽培の導入の時点で、銃が入っていたことが示唆される。また、集落跡地にて行った聞き取りでは、バクエレ、バカ・ピグミーのインフォーマント双方から、現在では行われぬ集団網猟が行われていたという情報が得られた。バクエレのインフォーマントによれば、バカ・ピグミーは現在のように自前の畑を持たず、バクエレの畑で農作業の手伝いを行うことにより農作物を得ていたという。なお、川沿いの集落跡地は現在でも頻繁に漁労活動やナッツ採集のための季節キャンプとして活用されている。

(4) 熱帯林植生へのヒューマン・インパクト

植生分類について、バカ・ピグミーの民俗分類と植物生態学による分類には一定程度の相似が認められた。これは、地形による冠水などのストレス、林床の光条件や林床植生の混み具合など生態学的な条件が科学分類およ

び民俗分類における共通の指標となっているためだと考えられる。バクエレと比較して、バカはより細かい空間スケールで森林植生を認識し、名づけていた。森林への人間活動の働きかけの種類により、人為的な植生に現れる植物の種多様性および攪乱指標種の分布は異なっていた。すなわち、定住的な居住地跡と狩猟採集や出作り焼畑のための一時的な森林キャンプ跡では、その後の植生景観に相違がみられ、人為影響の少ないと考えられる植生に比べても、一時的な森林キャンプ跡では植物の種多様性が高かった。バカ・ピグミーは、より人為的影響の少ないと考えられる植生に利用価値を見出しており、バクエレにおいては逆の傾向がみられた。一方で、家づくりなどいくつかの森林利用では、有用な森林植生カテゴリーについてバカ・ピグミーとバクエレに共通する性差も認められ、定住化による自然認識の変化には男女差があることを示唆するものと考えられた。

(5) 地表周辺の人為遺物

異なる年代に放棄された調査プロットごとに、さまざまな人為遺物が確認された。石器や土器、儀礼用鉄器は、1950 年以前の古い時期に放棄された集落において多くみられた。一方、1960 年ころを境に、ビール瓶やスコップ、ホーロー製食器などカカオ栽培および貨幣経済の本格的な浸透を示す商品の遺物が増加している。とくに土器については、異なる年代の集落放棄地にそれなりの量が見られた。

① 石器

・磨り器と丸石

放棄後 100 年以上経過していると思われる調査プロットにて半地表から発見。香料となる木の実やトウガラシなどの食品を磨り潰すための炊事用具である。現在は同様の用途に、木製の台と、球形の果実を乾燥させたものを用いているが、同じ形態だが、石でできた磨り器と丸石が見つかった。

② 土器・陶器

・小型のつぼ、土器片

放棄後 20-100 年とみられる調査プロットにて、小型のつぼや、皿などの土器片の散乱が林床部に見られた。

・腕輪

同様に放棄後 40-50 年とみられる調査プロットにて、発見。陶製の輪形装飾。サイ

ズからして、腕に付けたものと考えられた。

③金属

・鉄矛

放棄後50-60年とみられる調査プロットの地表近くにて発見。ドゥパヤゾンと呼ばれる鉄製の薄平べったい矛が、錆びついてはいるものの見つかった。聞き取りの結果、これらはかつて婚礼の際に男性から女性に支払われた婚資の一部であることが分かった。

・首輪、腕輪、足輪

放棄後50-60年とみられる調査プロットの地表近くにて発見。グオスと総称される金属製（鉄製と思われる）輪形装飾で、首輪（グオス・チョン、グオス・チー）、腕輪（グオス・ンボ）、足首輪（グオス・エ・コ）の各種がある。聞き取りの結果、これらもまた、かつて婚礼の際に男性から女性に支払われた婚資の一部であることが分かった。

・投げナイフ

放棄後50-60年とみられる調査プロットの地表近くにて拾ったものを調査プロット周辺の出づくり地の古老宅から確認。ボゲヤと呼ばれる戦闘用の投げナイフ。レイヨウの頭部を象ったデザインが施されている。

・スコップ

放棄後40年とみられる調査プロットから、植生の根に絡まった形で地中に埋もれているものを発見した。一部を除き、分解してしまっていた。

・ランプ

放棄後40年とみられる調査プロットから発見。ケロシン・ランプの金属部分がばらになったもの。

・ホーロー皿、深皿

放棄後10年から40年程度の調査プロットで頻繁に観察された。半分地中に埋まったり、地表に散乱する形で林床部に見られる。形が歪んだり、穴が開いているものが多い。

・不明

用途不明の鉄製具の一部とみられるものが数点確認された。

④プラスチック・ガラス

・ビール瓶

放棄後50-60年とみられる調査プロットにて、現在調査地域で流通している胴長型の瓶とは異なるずんぐりとした形のビール瓶がたくさん発見された。植民地時代に流通した瓶の形であるという話であった。

・プラスチック籠

放棄後15年とみられる調査プロットにて、劣化した黒灰色のプラスチックの塊が観

察された。カカオの秤量のために用いられた籠が残ったものと思われる。

⑤衣服

放棄後15年とみられる調査プロットにて、化学繊維製の衣服が地表に半分うずもれる形で観察された。

⑥ 人為地形・家屋跡地

調査地域周辺でみられる家屋の形式には、大きく分けて2タイプある。一つは、モンゴルと呼ばれるクズウコン科の林床草本の葉と木本の若枝で作られる半球ドーム型の小屋で、バカ人の伝統的居住様式である。もう一つは、ポトポトと呼ばれるラフィアヤシの幹を骨組みに土を練りこんで作られるバクエレ人はじめバンツー系農耕民の伝統的居住様式である。前者は、分解されやすい植物素材だけでできているので、天井や壁の葉を数週間おきに換え続けなければ数カ月で影形なくなるが、後者の土壁づくりの家屋は屋根の葺き替えを数年おきに続ければ十年以上維持することが可能である。

家屋倒壊後、地表には壁に練りこまれた土壌が積み重なって堆積する。この地表面の盛り上がり雨水によって流れ去る前に周辺植生に覆われた場合、森林回復後まで地表面に不自然な隆起が残っているのが観察された。これが、現地の人々が古い集落跡において具体的な家屋の配置を識別するひとつの手掛かりとなっていた。

(6) 現地調査と文献調査の整合性

ヤウンデ国立古文書館にて資料収集を行った結果、植民地行政官による1933年時点におけるジャー川中流域における定住集落の分布に関する手書きの地図および集落の概要に関する文献（"Rapport de tournée effectuée du 3 Avril 1933 au 14 Avril 1933 par le chef de la subdivision de Moloundou dans la région Konabembe"）を発見することができた。これを参照したところ、付表に示した放棄集落群のうち、旧 Messok 村、旧 Ndongo 村、旧 Leke 村、旧 Baad 村、旧 Mindourou 村の位置に関して、インフォーマントとともに収集した地理上の情報が一致し、聞き取り調査により得られる情報の信頼性、有効性について一定の確認ができた。ただ、この植民地期の行政官による報告には、バカ・ピグミーに関する記述が極めて乏しいが、これは、前述のようにバカ・ピグミーの集落が農耕民集落から数キロ離れた熱帯林内部に位置していたために短期間の訪問しかなされなかったと思われる行政官の目には入らなかった結果だと思われる。バクエレのインフォー

マントによる、「バカ（・ピグミー）は、森の中に隠れていた」「われわれの後ろに、バカ（・ピグミー）が居た」という表現は、多くのバカ・ピグミーが商人など外部世界からの来訪者と直接関係をもつ現在とは異なり、上流域に居住していた時期には、農耕民が労働力としてのバカ・ピグミーを囲い込むとともに外部世界とバカ・ピグミーの生活世界の間の緩衝材になっていた側面が推測される。

(7) 考察

中部アフリカのピグミー系諸集団の歴史について歴史言語学的なアプローチから研究を行った Bahuchet(1993)によれば、バカ・ピグミーは隣接するピグミー系集団アカ・ピグミーと言語学的に近縁であり、300年程度前までは両者は共通の集団であったことが推定されている。また、バカ・ピグミーは、バカ語という独自の言語を有するが、これは現在コンゴ共和国ウバンギ川の近くに居住するバンツ系農耕民 Ngbaka の使用言語に近縁とされている。これらから推察されるのは、バカ・ピグミーはもともとカメルーン東南部より南東の現在のアカ・ピグミーの分布地域に近いところから、何らかの原因により現在の分布域に移動してきたということである。その過程のどこかで両者は遭遇したのである。

バクエレはもともとコンゴ共和国北部熱帯林に分布の中心を持ち、森林環境によく適応した西バンツとして自立した生計経済を営んでいた(Siroto, 1969)。18世紀後半から19世紀にかけてのコンゴ北部からカメルーン東南部にかけての民族間紛争と民族間関係の再編の過程で、諸民族集団は移動と混淆状況を繰り返し、その中からバクエレ・ジャーコという「中間集団」的アイデンティティが生まれた。一部のバカ・ピグミーは、彼らと農作物と労働力の交換という形で関係を持つに至った。どうしてバカ・ピグミーがフルタイム狩猟採集民であることを止め、バクエレの動きを追うような移住履歴をもつに至ったのか。バクエレとバカ・ピグミーの遭遇時点で既にバカ・ピグミーが定住化なり農耕化をしていたのかどうかはこれからの検討を要する課題である。本研究が明らかにしたように、バクエレとバカの居住地移動は、外部世界との関係に強く影響を受けていた。その中でも、カメルーン独立の1960年を境に、両者の移動性は大きく変化をしたと考えられる。カメルーン独立政府に対する反対勢力がゲリラ化し、東部州に潜伏したことが、1960年の集住化・定住化政策執行の直接の理

由だったが、この移住は、それまでの森林内の小規模な集落間で農耕民家系集団とそれに関係を持つピグミー家系集団を単位に頻繁に生起していた、分裂と合体を繰り返す比較的小回りが利いた移住とは異なり、定住地の固定を強制するものだったからである。

(8) 今後の課題

人間活動と熱帯林植生の歴史的相互関係性について、より調査地点数を増やして(30-50地点を目標とする)、統計的分析の精度を上げたい。植生調査と民族植物学的聞き取りを引き続き行うとともに、光環境や温湿環境、音環境の実測を行って、さまざまな森林環境が住民にもたらす感覚特性を定量的に表現できるようにしたい。また、若手カメルーン人考古学者と協力して、昨年度に着手できなかった各サイトにおける考古遺物の分布の測量や放棄後60年以上を経過している一部の調査サイトでは、試坑を掘っての発掘調査を行って、土壌中の考古遺物の有無を確かめたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) OISHI Takanori (in press) "Impacts of cash crop cultivation on the relationship between the Baka Hunter-Gatherers and Neighboring Farmers in Southeastern Cameroon" *African Study Monographs*, Supplimentary Issue 43. (査読あり)

(2) 大石高典 (2011) 「身をほぐし、心をほぐす技術と平和力—出産・武術・狩猟を貫く『生存のためのワザ』を構想する—」『モノ学・感覚価値研究』第5号. *モノ学・感覚価値研究会*. pp. 69-72. (査読なし)

(3) 近藤恵、平石界、内田由紀子、大石高典 (2010) 「若手研究者のウェルビーイングと対人関係」男女共同参画に資する調査研究(GCOE Working Papers for reconstruction of the intimate and public spheres) pp. 1-27. (査読あり)

[学会発表] (計9件)

(1) 大石高典、「熱帯森林住民はどのように森林植生の多様性を認識しているか? : カメルーン東南部の狩猟採集民バカ・ピグミーと焼畑農耕民バクエレの通文化比較から」日

本アフリカ学会第48回学術大会、弘前大学
人文学部（弘前市）、2011年5月22日。

(2) OISHI Takanori (2011) "Partager la Faim et Partager les Aliments : Comment traiter la 'faim d'hydrates de carbone' chez les pecheurs/agriculteurs Bakwele du sud-est du Cameroun." 31st symposium ICAF(IUAES International Commission of Anthropology of Food): "PARTAGER LA NOURRITURE" Lasseube, Pyrenees Atlantiques, France, 2011年4月1日。(Oral Presentation)

(3) 舟川晋也、杉原創、大石高典、荒木茂「カメルーン東部州～アダマウ州の土壌と農牧業に関する広域調査報告」日本熱帯農業学会第108回講演会、沖縄コンベンションセンター（宜野湾市）、2010年10月9-10日。

(4) OISHI Takanori (2010) "Cash crop cultivation and Hunter-Gatherer society, and their relationships with Farmers: A case study of the Baka Pygmies and the Bakwele of South East Cameroon." Accepted presentation at International Conference on Congo Basin hunter-gatherers, the September 24th, 2010, CNRS Montpellier, France. (Oral Presentation)

(5) FONGNZOSSIE Evariste, OISHI Takanori, NGUENANG Guy Merlin and NKONGMENECK Bernard Aloys (2010) "Baka Hunter-Gatherer Perceptions of and Impacts on Mixed Evergreen and Semi-Deciduous Forests in East Cameroon." Accepted presentation at International Conference on Congo Basin hunter-gatherers, the September 23th, 2010, CNRS Montpellier, France. (Oral Presentation)

(6) OISHI Takanori (2010) "Collaborative research on human ecology in South East Cameroon: Toward Longterm Anthropological Research(LTAR) andspontaneous development of forest populations." JSPS Asian and African Science Platform Program Seminar: Collaboration for conservation and sustainable utilization of wildlife resources, Wildlife Research Center & Laboratory of Human Evolution, June 8-9th, 2010, Kyoto University, Kyoto, Japan. (Oral Presentation)

(7) OISHI Takanori (2010) "Family structure, residential groups, and mate preferences among the Baka hunter-gatherers and the Bakwele fisher-farmers of Cameroon: Toward a long-term comparative research of population dynamics." SCCR(Society for Cross Cultural Research) Session: "Diverse Contexts of Congo Basin Hunter-Gatherer Lifestyle and Subsistence", Joint Annual Meeting of SCCR/SASci/AAACIG 2010, February 18th

2010, Albuquerque Marriot, Albuquerque, NM, USA. (Oral Presentation)

〔図書〕（計2件）

(1) 大石高典 (印刷中)「民族誌の方法としてのホームビデオ」新井一寛、岩谷彩子、葛西賢太（編）『映像と宗教の最前線』せりか書房。

(2) 大石高典 (2010)「森の『バカンス』—カメルーン東南部熱帯雨林の農耕民バクウェレによる漁労実践を事例に—」, 木村大治、北西功一（編）『森棲みの社会誌』pp. 97-128. 京都大学学術出版会。

〔その他〕
ホームページ等

京都大学カメルーン・フィールドステーション内の研究紹介のホームページ
<http://www.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CamerounFS/wiki.cgi?page=%C2%E7%C0%D0%B9%E2%C5%B5>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大石 高典 (OISHI TAKANORI)

京都大学・こころの未来研究センター・研究員

研究者番号：30528724

(2) 研究協力者

EVARISTE FONGNZOSSIE

University of Yaoundé 1; Millenium Ecologic Museum; Researcher